

大学「朝鮮文化基礎論」教育と「2002年ソウルスタイル」展

著者	島村 恭則
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	44
ページ	301-317
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001872

大学「朝鮮文化基礎論」教育と「2002年ソウルスタイル」展

島村 恭則

1 はじめに

学校教育の現場における「総合的な学習の時間」の本格的実施（小・中学校は2002年度から、高等学校は2003年度から）と関わって、近時、学校教育と博物館教育との連携がさかんに議論されるようになり、またそれにもとづく実践も行なわれるようになっていく。国立民族学博物館においても、おそらくこうした動きと関わる議論や試みがなされているものと思われる。「みんぱっく」（子ども向け貸し出し用学習キット）の導入などは、おそらくその一端なのであろう。

ところで、博物館と学校教育との関わりをめぐるのは、小・中・高等学校との関係についてのみならず、大学教育とりわけ大衆化した現在の大学教育との連携についても、議論がなされる必要があるだろう。この場合、大学の授業に博物館の見学を組み込むケース（博物館学など、博物館自体を教育のテーマにしたものは、ここでの議論の対象ではない）は、これまでも多くなされているが、それはその授業を担当する大学教員の個人的な実践、個人芸のようなものとして行なわれているケースがほとんどなのではないだろうか。

大学の授業は、自立した研究者である個々の教員が、自らの学問研究の成果にもとづいて教育を行なうのであり、その運用は、基本的に個々の教員の主体性に委ねられている。したがって、博物館との連携が個人的な実践であることは、ある意味では当然であり、否定されるべきことではもちろんない。

ただし、一方で、近年、大学におけるFD（Faculty Development 大学教授団の資質開発。ファカルティ・デベロップメント）活動が要請され、その実践がさかんになっている中、大学教育における博物館の利用について、方法論的な議論や試行を行なう意義もまた否定されるべきではないだろう。

筆者は、こうした問題意識をもっているものであるが、この問題意識にもとづく具体的な実践として、このたび「2002年ソウルスタイル」に関わる一連の情報（展示、図録、関連出版物、その他）を大学での授業で活用するという試みを行なった。本稿では、その実践の経過とそこで浮上した課題等についてレポートする。

2 秋田大学の「朝鮮文化論」教育

筆者が実践を行なったのは、秋田大学教育文化学部における「朝鮮文化基礎論」の授

業においてである。秋田大学教育文化学部では、国際言語文化課程（入学定員 65 名，収容定員 260 名。日本・アジア文化，欧米文化，国際コミュニケーションの 3 選修からなる）の日本・アジア文化選修に，専門科目として朝鮮文化論関係の科目を開設している。主要なものとしては，「朝鮮文化基礎論」「日朝比較文化論」「朝鮮文化論」「朝鮮文化論演習」があり，それぞれⅠ～Ⅳというように年度によって同一名称であっても内容が変わるように設定されている¹⁾。国際言語文化課程の学生は，2 年生になった段階で各選修に進むが，これらの専門科目は，選修進級後，2 年生から 4 年生の間に履修する。また，他の選修の学生であっても，所定の範囲内で選修をまたいで履修が可能となっている。

「朝鮮文化基礎論」「日朝比較文化論」「朝鮮文化論」「朝鮮文化論演習」は，いずれも 1 学期 15 回で完結するもので，単位数は 2 単位。「朝鮮文化基礎論」「日朝比較文化論」が 1 学期に，「朝鮮文化論」「朝鮮文化論演習」が 2 学期に開講されている。いずれの科目も，担当教官は筆者である。

このうち，「朝鮮文化基礎論」がもっとも基礎的な科目であり，2 年生の履修が多い。本年度の受講生は，2 年生～4 年生まであわせて 27 名。そのうち，日本・アジア文化選修の学生が 7 割で，残りの 3 割は他の選修の学生である。この科目も含む朝鮮文化論関係の科目を履修する学生たちは，4 年次において，日本，中国，欧米，コミュニケーション論など多様な領域で卒業論文執筆のための研究を行なうことになるが，中には，朝鮮文化論で卒業論文を書く者もいる（2002 年度は 4 名）。

3 シラバスと実践経過

(1) シラバス

「朝鮮文化基礎論」は，はじめて専門科目として朝鮮文化論を学ぶ学生を主な対象としている。担当教官である筆者は，この科目の目標について，次のように設定し，それをそのままシラバスの「授業の目標」欄に記載している。

朝鮮文化論の入門編。朝鮮半島について，まったく白紙の状態の人に，基礎的情報と基本的視角を提供する。

この場合，1998 年度から 2001 年度まで秋田大学において朝鮮文化論関係の講義を担当していた真鍋祐子氏が，「率直に言って，着任して間もないころは学生たちのアジア，とくに韓国・朝鮮に対する偏見の深さに驚かされ，暗澹とし，とまどいを禁ずることができ」なかった（真鍋祐子「秋田大学での四年間をふりかえって」『旭水』26，旭水会，2002 年）と述懐しているような環境の中でこの授業を開講しなければならないということが，前提条件となっている²⁾。

したがって、筆者としては、朝鮮半島に対する日本版オリエンタリズムや、根拠のない後進国イメージなどを、リアリティをもって打ち砕き、等身大の朝鮮半島文化を学生たちに提示する必要があった。また、受講生の多くは、受験の偏差値はそれなりに高くても、新聞はほとんど読んだことがなく、世界の情勢に対する興味や関心もあまりない学生たちであり、こうした学生に、朝鮮半島文化について、かなりの程度まで噛み砕いて教える必要もあった。また1~2年前は高等学校の学生であった2年生たちに、抽象的な論述にあふれた教科書を与えるのはためらわれ、ビジュアルな教材を使用することが、この段階では効果的であろうとも思われた。

こうした与件への対応を考えてゆくうちに、筆者は、授業と博物館展示（それは一部の専門家のためではなく、広範な市民を対象に構成されているため、高度な内容であってもわかりやすいものになるようさまざまな工夫がこらされているのがふつうである）との有機的なリンクを試みようとするに至った。

折しも、開講時期は、民博における特別展「2002年ソウルスタイル」（以下、「ソウルスタイル」）の開催時期と重なっている。同展示には、カラーの写真はもちろんのこと、学問的なエッセーも豊富に収録された図録も用意されている。そこで、この特別展を利用しない手はないと考えたのであった。

シラバスの「授業の概要」欄には、次のように記した。

今年は、国立民族学博物館（大阪）で、特別展「2002年ソウルスタイル」が開催される（3月21日～7月16日）。これは、ソウル市にくらすふつうの人々の日常生活をとりあげ、現代韓国の社会と文化について、一般市民にわかりやすく説明しようとする画期的な展示で、わたしもこの展示の制作に関わった関係者の一人である。本講義は、この展示と講義とをリンクさせ、現代韓国のナマの姿を具体的に解説してゆく。

教科書は、本特別展の図録（カラー写真多数）を使用する。また、副教材（地図）として、韓国観光公社から寄贈された「韓国・ソウルマップ」を配布するので、毎回持参すること。

なお、受講生諸君と相談のうえ、会期中に、本特別展の見学旅行（大阪鶴橋焼肉ツアー付き）を行なう予定（希望者のみ）。

(2) 実践経過

授業は、基本的に、図録の目次に沿って行なった。ただし、初回と2回目には、韓国と朝鮮民主主義人民共和国との違い、朝鮮半島の地理ソウルはどこにあるか、といった概況説明を行ない、2回目の後半に、「都市ソウルの構造<江北と江南>」に触れたところから、「ソウルスタイル」（舞台は江南である）の世界へ入っていった。

各回（1回90分）で、だいたい一つの章をとりあげた。図録「ソウルスタイル」は、冒頭の「ようこそソウルスタイルへ」から後半部の「ハルモニの部屋」まで、12のセクションに分かれており、全17回（本年度実績。基準は15回）の授業回数にふさわしい

構成となっている。

各回の授業の進め方は、図録の写真・図を用いての絵解き（その内容は、筆者自身の韓国での伝費アパート経験談などで肉付けしている）を中心に据え、次にコラム「くらしのソウルスタイル」をとりあげ、その内容について、関連エピソードも交えて解説した。

また、展示期間中に刊行された『月刊みんぱく』に掲載の関連記事もプリントして配布し、その内容について解説した。たとえば、「キッチン」および「アボジとオモニの部屋」のセクションでは鈴木文子氏の「揺れる韓国の主婦たち」『月刊みんぱく』2002年6月号を、「ダイニング」では林史樹氏の「韓国の漢方ドリンク」『月刊民博』2002年4月号を、「アボジの仕事場」では朝倉敏夫氏の「韓国の屋台、ポジャンマチャ」『月刊みんぱく』2002年5月号を、というように用いた。

他にも、本文の記述を補うものとして、たとえば「ハルモニの部屋」での祖先祭祀の説明にあたっては、絵本『ソリちゃんのチュソク』（イ・オクベ＝文・絵、セーラー出版、2000年）を紙芝居風読んで聞かせるなど、細かい工夫を行なった。

以上の内容は、展示＝図録のストーリーに沿いながら、それを補足する形で進めた部分である。これに対して、授業を展開してゆくうちに、展示＝図録のストーリー構成の範囲内には収まらないが、ぜひともとりあげるべきだと考えるに至った主題（課題）も存在する。それは、次のようなものである。

①「ソウルスタイル」で描かれている家族像は、いささか「理想的」にすぎるのではないか。「ソウルスタイル」では、家族の中の葛藤は描かれていない。もちろん、展示や図録にそれがないのは、ある意味では当たり前のことであり、そのこと自体を批判したわけではない。ただ、授業で韓国について語ろうとした場合には、やはり葛藤についての言及が必要であろう。

このようなことを考えていた矢先に、チョ・ユンギョン制作『家族プロジェクト——父の家』（2002年度ソウル女性映画祭最優秀賞受賞作品）が、NHKのETV2002「シリーズ韓国のドキュメンタリー」の第2回として放送された（2002年5月28日）。その内容は、時代の変化の中における韓国のある家族の葛藤を、父親と母親、父親と長男、父親と長女といった対立軸を浮き彫りにしながら描き出したもので、「ソウルスタイル」の「李さん一家」像を相対化するには打ってつけのものであった。さっそく、7回目の授業の時間にこれを見せた。

②歴史の欠如。文化人類学における共時的な視点で対象を切り取っている今回の「ソウルスタイル」に歴史的表象がないのは当然のことである。筆者は、この点をもって展示批判をしようとしているわけではまったくない。しかし、17回にわたる授業として「朝鮮文化基礎論」を展開しようとする場合、あるいは、朝鮮文化論への入門編としてこの授業が備えているべき体系性という点を考慮した場合には、ある程度、歴史への言及が

必要になってこよう。とはいうものの、一方で時間の制約があることも確かであり、熟慮の末、ソウルの近代社会史について言及することにした。

具体的には、ソウル特別市博物館開館準備特別展図録『ソウルの昔のすがた』（ソウル特別市博物館、1998年）に収められた豊富な写真資料を教材提示装置で提示し、解放後のソウル、日帝時代のソウル、朝鮮王朝末期のソウルというように遡上しながら、ソウルをめぐる叙述の「歴史化」につとめた。解放後のソウルについては経済成長や民主化運動に関して、日帝時代については日本による植民地支配の実態に関して、それぞれ60分ほど時間を割いたが、当然のことながら、このような時間で収まる内容ではなく、これらの主題については、2学期開講の「朝鮮文化論」で本格的に言及することとなった。

③社会の多層性について。「ソウルスタイル」でとりあげられている家族は、いわば都市の「中産階級」である。授業では、これ以外の階層についてもとりあげる必要があると考え、具体的には、筆者がかつて若干見聞したことのあるタルトンネ（ソウル市城北区月谷洞）の暮らしについて、スライドを多用しながら言及した。高層アパートの多くがタルトンネの立ち退きによる再開発で形成されていることを、映像を通して強調した。

④前項とも関わるが、労働運動や民主化運動をはじめとする政治的な運動や、人々の政治意識については、「ソウルスタイル」ではまったく触れられていない。「生活文化」を主題とし、また国立の博物館での表象という条件を考慮すれば、これは当たり前のことである。しかし、それらが現実存在する社会現象であることもまた事実であることから、「朝鮮文化基礎論」の授業展開においてそれらをまったく取り扱わないことは問題であろうと考え、若干の言及を行なった。具体的には、展示期間中に刊行された洪世和『セーヌは左右を分ち、漢江は南北を隔てる』（米津篤八訳、みすず書房、2002年）の内容を咀嚼した上で、もう一つのソウル像を紹介した。

著者の洪世和は、ソウル大学在学中に「民主守護宣言文」事件で除籍を経験し（のち卒業）、その後、「韓国民主闘争国民委員会」「南朝鮮民族解放戦線準備委員会（南民戦）」に参加。フランス滞在中に「南民戦事件」で帰国不可能となり、パリでタクシー運転手などをしながら文筆活動を行ない、2002年に韓国へ永住帰国した人物で、パリ亡命中に刊行された『コレアン・ドライバーはパリでは眠らない』（日本語版は、みすず書房、1997年）などで知られている。

本書には、ソウルについての著者ならではの短い記述がある。たとえば、

ガーデン、パーク、CC

昔は知らなかった単語。〇〇ガーデンでカルビ焼きを食べ、△△CC（カントリークラブ）でゴルフに興じ、××パークで恋人と寝る者たちが、わが国の人間であるという事実を、やっと知った。

ノレバン

話には聞いていた場所に、初めて入った。私も何曲か歌った。韓国社会を知るために、ぜひ行くべき場所。ストレスをほぐし、神経をほぐし、不安心理をほぐし、抑圧感情も処理してくれる、極めて重要な精神病院。ノレバンがなくなったら精神病者が急増するだろう。そして、暴行罪、騒擾罪、路上放尿罪、放歌高吟罪などの犯罪も、いまの倍以上に増えるだろう。

大学路

若者はやたら多かったが、若い目の輝きは見られなかった。もはや東崇洞ではなかった。東崇洞だった頃には、貧しくとも、探求する目の輝きがあった。肉体と同様、精神にも肉がついたようだ。若者の太った肉体が健康でないように、若者の太った精神も健康ではない。

仁寺洞

人工的な空間。抵抗の息づかいが見えなかった。

子どもたち

天真爛漫に走り回る子どもたちの姿を、一度も見られなかった。パキスタンの子らは一日十時間労働をし、韓国の子らは少なくとも十四時間ずつ労働している。「アイグ、可哀相なわが子よ！」という声が出ないはずがない。「わが子利己主義」に火がつく。

といったものである。授業では、とりわけこうした記述を多くとりあげることで、「ソウルスタイル」の相対化をはかろうと試みた。なお、念のために言い添えておくと、ここで問題なのは、「ソウルスタイル」で描かれる「ソウル」と『セヌは左右を分かち、漢江は南北を隔てる』で論じられる「ソウル」の、どちらが本当のソウルか、といったことではない。重要なのは、あくまでも、視点と表象を開かれたものにしておくことができるかどうかということであり、本授業も、そのような問題意識の上で展開を試みたものである。

以上のような補足を行ないながら、授業を進めてきたが、ここでもう一つ特記しておきたいのは、学生たちの有志が、秋田から民博を訪れ、「ソウルスタイル」の展示見学を中心にした大阪ツアーを実施したという事実である。ツアーは、6月28日から30日まで、2泊3日で行なった。参加したのは、受講生のうちの有志7名と筆者であり、「ソウルスタイル」展見学の他、「朝鮮半島の文化」をはじめとする民博の常設展示や、リバティイおおさか(大阪人権博物館。とりわけ在日コリアン等をめぐる展示)の見学を行なった。また、生野区に赴き、ホルモンを食べるとともに、御幸通商店街に近い観音寺(朝鮮半島系住民を主たる信者とする)を訪ね、ワールドカップ観戦会に集まっていた地元の朝鮮半島系住民の皆さんといっしょに、韓国チームを応援した。

この見学会に参加した学生の一人は、「大阪は韓国との関係がものすごく深いことがわ

かりました。だから『ソウルスタイル』という展覧会を行なうことも可能だったのではないのでしょうか。秋田みたいな地方都市では無理」(3年生女子)と述べているが、「地方都市では無理」かどうかは別として、この指摘はなかなか鋭い。

「ソウルスタイル」では、「みんぱくマダン」や「みんぱく市場」、「ワンコリアフェスティバルインみんぱく」をはじめ、多くの局面に京阪神在住の朝鮮半島系住民がさまざまな形で関与しており、このことが「ソウルスタイル」に独特のダイナミズムをもたらしていたと筆者は考える。学生たちとの大阪ツアーを実施する中で、みんぱくと大阪在住朝鮮半島系住民とのつながりの深さ、その舞台としての大阪の多文化都市的側面というものを、あらためて認識した次第である。

4月からはじまった授業は、9月20日に終了した。成績評価の手段としての学期末レポートは、

秋田大学では、韓国・朝鮮語や韓国・朝鮮文化について学ぶ学生は、「少数派」「変わり者」とされているそうです。彼らを「少数派」「変わり者」とみなしている「多数派」「ふつう」の学生たち(場合によっては、韓国・朝鮮あるいは「アジア」について無知であったり、偏見の持ち主であったりするかもしれません)に対して、

- ①韓国・朝鮮の社会や文化とはどのような社会・文化か。
 - ②それを学ぶ意義は、どのようなものか。また、それはなぜか。
 - ③わたしとあなたはこれからどのように生きていくべきか。また、それはなぜか。
- を説明する手紙を書いてください。

その際、授業で扱った「ソウルスタイル」の趣旨やそこで得られる情報を適宜、取り込むこと。

という課題を設定して作成させた。

提出されたレポート内容の分析は、別の機会に行ないたいが、等身大のソウル(韓国)情報をもとに、想定される周囲の偏見を論破し、無知な友人の救済を真摯に試みようとする内容のものが多かった。ただ、授業の中で筆者が強調していた、『ソウルスタイル』は、韓国の『代表』というわけではなく、あくまでも一つの家族の姿である、そして、これは韓国に関してのみにいえることではなく、『文化』というものに『典型』『代表』というものが存在しないのは、どの地域においても同様である。『文化』とはそのようなものなのだ」といった「ポストモダン」な観点については、理解がいまひとつという結果に終わったレポートも少なくなく、このあたりが、2学期に開講される「朝鮮文化論」での課題として浮上してきた³⁾。

4 結び

以上、「ソウルスタイル」を用いての大学授業の実践報告を行なった。今回の展示については、筆者以外にも、多くの大学教員が学生をともなって見学に訪れたり、あるいは授業の中でこれをとりあげたりしていたのではないだろうか。「ソウルスタイル」に限らず、特別展示期間中や期間終了後には、こうした実践についての報告を持ち寄って議論する機会が設けられてもよいのではないかと筆者は考えている。本稿は、そうした議論へむけてのたたき台として提出するものである。

なお、来年度の「朝鮮文化基礎論」においても、筆者は「ソウルスタイル」を授業の柱に据えようと考えている。その場合、展示自体は終了しているので、展示内容を記録したビデオなどがあれば、これを購入して使用したいと考えている。展示終了後の展示成果活用法のあり方の一つとして実践を試みたい⁴⁾。

注

- 1) これら朝鮮文化論関係の科目の他に、ネイティブの非常勤講師の方の多大な助力をおおぎながら、「朝鮮語表現法」「朝鮮語活用法」「朝鮮語会話活用法」(以上、全学共通教養基礎教育科目)、「実務朝鮮語」「時事朝鮮語」「朝鮮語コミュニケーション」(以上、日本・アジア文化選修専門科目)などの語学科目が開設されている。
- 2) 真鍋氏は、この述懐に続いて、「しかし、やがて少数ながら隣国に関心を開ける学生たちがぼつぼつ増えていき」「後半はじつに活気にあふれ、充実した日々を送ることができた」と述べており、状況は改善の方向をたどったことがわかる。とはいうものの、「少数の学生」以外の学生たちに、「韓国・朝鮮に対する偏見」がまったくなくなっているかという点、予断は許されないという状況であろう。筆者は、このような状況の中で、朝鮮文化論に関わる教育に従事しているものである。
- 3) 「朝鮮文化基礎論」以外の朝鮮文化論関係科目のおよその内容は、次のとおりである。
朝鮮文化論：朝鮮半島（と日本を含む東アジア全体）をどう見るべきか、についての方法論、概念、分析道具を教授する。オリエンタリズム、帝国主義、ポストコロニアリズム、近代と脱近代、アイデンティティ、多文化主義などについて、朝鮮半島と日本の事例を用いながら解説する。
朝鮮文化論演習：朝鮮文化論に関する最新文献の講読。
日朝比較文化論：在日朝鮮半島系住民をめぐる諸問題を検討。これを通して、安易な「比較文化論」は成立しないことに気づかせるのが目標。
- 4) 最後に、本文中では触れる機会がなかったが、筆者は、大衆化時代の大学教育における教科書・資料集として、高度な内容をモノ資料に即してビジュアルに示した博物館図録や博物館刊行の機関紙は最適であると考え、その使用を実践していることを付記しておきたい。これまで、国立歴史民俗博物館の『異界万華鏡』（武蔵大学人文学部・民俗宗教論）、大阪人権博物館の『大阪人権博物館展示総合図録——人権からみた日本社会』（山梨県立女子短期大学・日本文化論）、国立歴史民俗博物館の歴史系総合誌『歴博』（國學院大學・日本民俗学）などを用いてきた。

대학 「조선문화 기초론」 교육과 「2002년 서울 스타일」 전

島村 恭則

1 들어가며

학교교육의 현장에 있어서 「종합적인 학습의 시간」의 본격적 실시(초등·중학교는 2002년도부터, 고등학교는 2003년도부터)와 연관되어, 최근, 학교교육과 박물관 교육과의 연대가 활발히 논의되고 있고, 또 그에 기초한 실천도 행하여지게 되었다. 국립 민족학 박물관에 있어서도, 분명 이러한 움직임도 관련되는 논의와 시도가 이루어지고 있다고 생각한다. 「민백」(어린이 대출용 학습도구)의 도입 등은, 분명히 그러한 한 부분일 것이다.

그런데, 박물관과 학교교육과의 관계를 둘러싸고는, 초·중·고등학교와의 관계에 대해서뿐만 아니라, 대학교육, 특히 대중화한 현재의 대학교육과의 연대에 대해서도, 논의가 이루어질 필요가 있을 것이다. 이 경우, 대학의 수업에 박물관의 견학을 도입하는 케이스(박물관학 등, 박물관 자체를 교육의 테마로 한 경우는, 여기에서 논의의 대상이 아니다)는, 이제까지도 많이 이루어지고 있으나, 그것은 그 수업을 담당하는 대학교원의 개인적인 실천, 개인적 방법론과 같은 것으로서 이루어지고 있는 케이스가 대부분의 경우는 아닐까.

대학의 수업은, 자립한 연구자인 개개의 교원이, 스스로의 학문연구의 성과에 기초하여 교육을 행하는 것이며, 그 운용은 기본적으로 개개의 교원의 주체성에 위임되어 있다. 따라서, 박물관과의 연대가 개인적인 실천이라는 것은, 어떤 의미에서는 당연한 것이며, 부정되어야 하는 것은 물론 아니다.

단, 최근 대학에 있어서의 FD(Faculty Development 대학 교수단의 자질 개발) 활동이 요청되고, 그 실천이 활발해지고 있는 속에서, 대학교육에 있어서의 박물관의 이용에 대하여, 방법론적인 논의와 시도를 행하는 의의 역시도 부정되어서는 안되리라.

필자는, 이러한 문제의식을 가지고 있으며, 이 문제의식에 근거하는 구체적인 실천으로서, 이번 「2002년 서울 스타일」에 관한 일련의 정보(전시, 도록, 관련 출판물, 그 외)를 대학에서의 수업에 활용하는 시도를 행하였다. 본고에서는, 그 실천의 경과와 거기에서 떠오른 과제 등에 대해 보고한다.

2 秋田대학의 「조선문화론」 교육

필자가 실천을 행한 것은 秋田대학 교육문화학부에 있는 「조선문화기초론」의 수업이다. 秋田대학 교육문화학부에서는, 국제언어문화 과정(입학정원 65명,

수용정원 260 명. 일본·아시아 문화, 구미문화, 국제커뮤니케이션의 3 선택 이수료 이루어짐)의 일본·아시아 문화 선택이수에, 전문과목으로서 조선문화론 관계의 과목을 개설하고 있다. 주요한 것으로서는, 「조선문화기초론」, 「일본·조선비교문화론」, 「조선문화론」, 「조선문화론연습」이 있으며, 각각 I~IV이라는 것처럼 연도에 따라 동일명칭이라고 해도 내용이 바뀌도록 설정되어 있다¹⁾. 국제언어문화 과정의 학생은, 2학년이 되는 단계에서 각 선택이수에 올라가게 되고, 이러한 전문과목은, 선택이수 진급 후, 2학년부터 4학년의 기간 동안에 이수한다. 또, 다른 선택이수의 학생일지라도, 소정의 범위 내에서 선택이수를 이수하는 것이 가능하게 되어 있다.

「조선문화기초론」, 「일본·조선비교문화론」, 「조선문화론」, 「조선문화론연습」, 어느 과목이나 1 학기 15 회로 완결하는 것으로, 학점은 2 단위다. 「조선문화기초론」, 「일본·조선비교문화론」이 1 학기에, 「조선문화론」, 「조선문화론연습」이 2 학기에 개설되어 있다. 어느 과목도 담당교관은 필자이다.

이 중에서, 「조선문화기초론」이 가장 기초적인 과목으로 2학년생의 이수가 많다. 올 수강생은, 2학년생~4학년생을 합쳐서 27 명. 그 중에서, 일본·아시아 문화 선택이수의 학생이 7 할이며, 나머지 3 할은 다른 선택이수의 학생이다. 이 과목을 포함하여 조선문화론 관계의 과목을 이수하는 학생들은, 4년차에 있어서, 일본, 중국, 구미, 커뮤니케이션론 등 다양한 영역에서 졸업논문을 집필하기 위해 연구를 행하게 되며, 그 중에서는, 조선문화론으로 졸업논문을 쓰는 학생도 있다(2002 년도에는 4명).

3 강의요강과 실천경과

(1) 강의요강

「조선문화기초론」은, 처음으로 전문과목으로서 조선문화론을 배우는 학생을 주된 대상으로 한다. 담당교관인 필자는, 이 과목의 목표를 다음과 같이 설정하고, 그것을 그대로 강의요강의 「수업의 목표」란에 기재하고 있다.

조선문화론의 입문편. 조선반도에 관하여, 완전히 백지의 상태의 학생에게, 기초적 정보와 기본적 시각을 제공한다.

이 경우, 1998 년도부터 2001 년도까지 秋田대학에 있어서 조선문화론 관계의 강의를 담당하고 있던 眞鍋祐子씨가, 「솔직히 말해 부임하고 얼마 안되던 때는 학생들의 아시아, 특히 한국·조선에 대한 편견의 깊음에 놀라고, 암담하고, 당혹함을 금할 수가 없었다」(眞鍋祐子「秋田대학에서의 四年間을 회고하며」『旭水』26, 2002 年)고 술회하고 있는 것과 같은 환경 속에서 이 수업을 개강할 수 밖에 없다는 것이,

전제조건이 되어있다²⁾.

따라서, 필자로서는, 조선반도에 대한 일본판 오리엔탈리즘과 근거 없는 후진국 이미지 등을, 리얼리티로써 깨어버리고, 실제의 조선반도문화를 학생들에게 제시할 필요가 있었다. 또한, 수강생의 다수가, 수험의 편차치는 나름대로 높지만 신문은 거의 읽은 적이 없고, 세계 정세에 대한 흥미나 관심도 그다지 없는 학생들이어서, 이러한 학생들에게, 조선반도문화에 대해 상당히 아주 쉽게 가르칠 필요가 있었다. 또, 1~2년 전에는 고등학교 학생이었던 2학년학생들에게, 추상적인 논술로 가득 찬 교과서를 주는 것이 망설여져, 시각적인 교재를 사용하는 것이 이 단계에서 효과적이었다고 생각한다.

이러한 요건에의 대응을 생각해 가는 동안, 필자는 수업과 박물관 전시 (그건 일부의 전문가를 위한 것이 아닌, 광범위한 시민을 대상으로 구성되어 있어서, 높은 수준의 내용이라 해도 이해하기 쉽도록 여러 가지 고안이 되어 있는 것이 보통이다) 와의 유기적인 연결을 시도하려고 생각하게 되었다.

때마침 개강기간은, 민박에 있어서의 특별전 「2002년 서울스타일」 (이하, 「서울스타일」) 의 개최기간과 겹쳐 있었다. 이 전시는, 칼라 사진은 물론, 학문적인 에세이도 풍부히 실린 도록도 준비되어 있다. 거기서, 이 특별전을 이용하지 않을 이유가 없다고 생각했던 것이다.

강의요강의 「수업의 개요」 란에는 다음과 같이 적었다.

올해는, 국립민족학박물관 (오사카) 에서, 특별전 「2002년 서울 스타일」이 개최된다. (3월 21일~7월 16일). 이것은, 서울시에 사는 보통의 사람들의 일상생활을 채택하여, 현대 한국의 사회와 문화에 대하여, 일반시민에게 알기 쉽게 설명하고자 하는 획기적인 전시로, 나도 이 전시의 제작에 관여한 관계자의 한 사람이다. 본 강의는, 이 전시와 강의를 연결하여, 현대 한국의 생생한 모습을 구체적으로 해설하여 간다.

교과서는, 본 특별전의 도록 (칼라 사진 다수) 을 사용한다. 또, 부교재 (지도) 로서, 한국관광공사에서 기증된 「한국·서울 지도」 를 배포할 것이므로, 매회 지참할 것.

또한, 수강생 모두와의 상담을 하여, 회기 중에, 본 특별전의 견학여행 (大阪 츄후하시 불고기 투어 포함) 을 행할 예정 (희망자에 한함).

(2) 실천경과

수업은 기본적으로, 도록의 목차를 따라 행해졌다. 단, 첫 회와 둘째 회에는, 한국과 조선민주주의 공화국과의 차이, 조선반도의 지리, 서울은 어디에 있는가, 라고 하는 개략적 상황 설명을 하고, 두 번째 회의 후반에, 「도시 서울의 구조 (강북과 강남)」 을 다루고 「서울 스타일」 (무대는 강남이다) 의 세계에 들어갔다.

각 회 (1 회 90 분) 에서 대개 하나의 장을 마쳤다. 도록 「서울 스타일」 은, 앞부분의 「어서오세요, 서울 스타일에」에서부터 후반부의 「할머니의 방」까지, 12 개의 섹션으로 나뉘져 있어, 전 17 회 (올해 실적. 기준은 15 회) 의 수업횟수에 잘 들어맞는 구성이 되어있다.

각 회의 수업의 진행 방법은, 도록의 사진·그림을 이용한 그림 설명 (그 내용은, 필자 자신의 한국에서의 전세아파트 경험담 등을 덧붙인 것이다) 을 중심으로 하고, 그 다음으로, 칼럼 「삶의 서울 스타일」을 채택하여, 그 내용에 대해 관련 에피소드를 섞어가면서 해설했다.

또한, 전시 기간중에 간행된 “월간 민박” 에 게재된 관련기사도 프린트하여 배부하고, 그 내용에 대해서 해설했다. 예를 들어, 「키친」 및 「아버지와 어머니의 방」의 섹션에서는 鈴木文子씨의 「흔들리는 한국의 주부들」 “월간 민박” 2002 년 6 월호를, 「다이닝」에서는 林史樹씨의 「한국의 한방드링크」 “월간 민박” 2002 년 4 월호를, 「아버지의 일터」에서는 朝倉敏夫씨의 「한국의 이동식 간이식당, 포장마차」 “월간 민박” 2002 년 5 월호를, 이라는 식으로 이용하였다.

그 외에도, 본문의 기술을 보충하기 위한 것으로서, 예를 들어 「할머니의 방」의 조상제사의 설명에 있어서는, 그림책 “소리의 추석” (이억배=글·그림, 세라 출판, 2002 년) 을 종이인형극용으로 읽고 듣게 하는 것 등, 세세한 고안을 하였다.

이상의 내용은, 전시=도록의 스토리에 따라가면서, 그것을 보충하는 형태로 진행한 부분이다. 이에 비해, 수업을 전개해 가는 동안, 전시=도록의 스토리 구성의 범위 내에는 포함되어 있지 않으나, 꼭 강의해야 한다고 생각되는 주제 (과제) 도 있었다. 그것은 다음과 같은 사항들이다.

① 「서울 스타일」에서 그려지고 있는 가족상은, 조금은 너무 「이상적」이지 않은가. 「서울 스타일」에서는 가족간의 갈등은 그려지고 있지 않다. 물론, 전시나 도록에 그것이 없는 것은 어떤 의미에서는 당연한 것이므로, 그 자체를 비판하고 싶은 것은 아니다. 단지, 수업에서 한국에 대해 이야기하려고 하는 경우에는, 역시 갈등에 대해서 언급이 필요할 것이다.

이러한 것들을 생각하기 시작하던 그 때, 조윤경 제작 『가족 프로젝트——아버지의 집』 (2002 년도 서울 여성영화제 최우수상 수상 작품) 이, NHK의 ETV 「시리즈 한국의 도큐먼트」의 2 회로서 방송되었다 (2002 년 5 월 28 일). 그 내용은, 시대의 변화 속에 있어서의 한국의 한 가족의 갈등을, 부친과 모친, 부친과 장남, 부친과 장녀라고 하는 대립 축을 떠올려 그려내고자 하는 것으로, 「서울 스타일」의 「이선생 일가」 상을 상대화하기에 딱 알맞은 것이었다. 바로 7 회 제의 수업시간에 이것을 보여주었다.

② 역사의 결여. 문화인류학에 있어서 공시적인 시점으로 대상을 채택하고 있는 이번의 「서울 스타일」에 역사적 표상이 없는 것은 당연한 일이다. 필자는, 이 점을

들어 전시비판을 하려고 하는 것은 절대로 아니다. 그러나, 17 회에 걸친 수업으로서 「조선문화기초론」을 전개하려고 할 경우, 혹은, 조선문화론에의 입문편으로서 이 수업이 마련하고 있어야 하는 체계성이라는 짐을 고려할 경우에는, 어느 정도 역사에의 언급이 필요하게 된다. 그렇다고는 하지만, 한편으로 시간의 제약이 있다는 것도 사실이므로, 숙고를 거쳐 서울의 근대사회사에 대해서 언급하기로 하였다.

구체적으로는, 서울특별시 박물관 개관준비 특별전 도록 “서울의 옛날 모습”(서울특별시 박물관, 1998년)에 수록된 풍부한 사진자료를 교재제시장치로 제시하여, 해방후의 서울, 일제시대의 서울, 조선왕조 말기의 서울이라는 식으로 거꾸로 올라가면서, 서울을 둘러싼 서술의 「역사화」에 힘썼다. 해방후의 서울에 대해서는 경제성장파와 민주화운동에 관해서, 일제시대에 대해서는 일본에 의한 식민지 지배의 실태에 관해서, 각각 60분 정도 시간을 나누었으나, 당연한 일이지만, 그 시간으로 끝낼 수 있는 내용이 아니므로, 이 주제들에 대해서는 2학기개강의 「조선문화론」에서 본격적으로 언급하게 되었다.

③ 사회의 다층성에 대하여. 「서울 스타일」에서 채택되고 있는 가족은 말하자면 도시의 「중산계급」이다. 수업에서는, 그 이외의 계층에 대해서도 언급할 필요가 있다고 생각하여, 구체적으로는 필자가 예전에 약간 듣고 본 적이 있는 달동네(서울시 성북구 월곡동)의 생활에 대하여 슬라이드를 이용하면서 언급했다. 많은 고층 아파트가 달동네의 퇴거에 의한 재개발로 형성되었다는 사실을, 영상을 통해 강조하였다.

④ 앞 항목과도 관련되지만, 노동운동과 민주화운동을 시작으로 하는 정치적인 운동과 사람들의 정치의식에 관해서는 「서울 스타일」에서는 전혀 다루어지지 않고 있다. 「생활문화」를 주제로 하며 또한 국립의 박물관에서의 표상이라고 하는 조건을 고려한다면, 이것은 당연한 일이다. 그러나, 그것이 현실로 존재하는 사회현상이라는 점도 또한 사실이라는 점에서는, 「조선문화기초론」의 수업전개에 있어 그것을 전혀 다루지 않는다는 것도 문제라고 생각하여 약간의 언급을 하였다. 구체적으로는, 전시기간중에 간행된 홍세화 “세느강은 좌우를 가르고 한강은 남북을 가르다”(米津篤八역, 미스즈書房, 2002년)의 내용을 음미하고, 또 하나의 서울상을 소개했다.

저자 홍세화는, 서울대학 재학 중에 「민주수호선언문」사건으로 제적되고(나중에 졸업), 그 후, 「한국민주투쟁 국민위원회」, 「남조선 민족해방 전선 준비위원회(남민전)」에 참가. 프랑스 체재 중에 「남민전 사건」으로 귀국이 불가능하게 되어, 파리에서 택시 운전수 등을 하면서 문필활동을 하고, 2002년에 한국에 영주귀국한 인물로, 파리 망명 중에 간행된 “나는 빠리의 택시운전사”(일본어판은, 미스즈書房, 1997년) 등으로 알려져 있다.

본서에서는, 서울에 대한 저자만의 특유한 짧은 기술이 있다. 예를 들면,

가든, 파크, CC

예전에는 몰랐던 단어. ○○가든에서 갈비구이를 먹고, △△CC (컨트리 클럽)에서 골프를 즐기고, 파크에서 애인과 자는 사람들이 우리나라의 사람이라는 사실을, 겨우 알았다.

노래방

말로만 들었던 장소에 처음으로 들어갔다. 나도 몇곡인가를 불렀다. 한국사회를 알기 위해 꼭 가야 하는 장소. 스트레스를 풀고, 신경을 풀고, 불안심리를 풀고, 억압된 감정도 처리해 주는, 극히 중요한 정신병원. 노래방이 없어진다면 정신병자가 급증하리라. 그리고, 폭행죄, 소요죄, 노상방뇨죄, 고성방가죄 등의 범죄도 지금의 두 배 이상 늘어나리라.

대학로

젊은이들은 엄청나게 많았지만 젊은 눈의 빛남은 볼 수가 없었다. 이제는 동승동이 아니었다. 동승동이었던 적에는 가난하더라도 탐구하는 눈의 빛이 있었다. 육체와 마찬가지로 정신에도 살이 썬 모양이다. 젊은이의 살 썬 육체가 건강한 것이 아니듯, 젊은이의 살 썬 정신도 건강한 것이 아니다.

인사동

인공적인 공간. 저항의 숨결이 보이지 않았다.

어린이들

천진난만하게 뛰어 다니는 어린이들의 모습을 한 번도 보지 못했다. 파키스탄의 어린이들은 하루 열 시간 노동을 하고, 한국의 어린이들은 적어도 열 네 시간씩 노동을 하고 있다. 「아이고, 불쌍한 내 새끼!」라는 말이 안 나올리가 없다. 「내 아이 이기주의」의 불이 붙는다.

라고 하는 것이다. 수업에서는, 우선 이러한 기술을 많이 다루는 것으로, 「서울스타일」의 상대화를 시도하였다. 또한 만일을 위해 덧붙여두지만, 여기에서 문제는, 「서울스타일」에서 그려지는 「서울」과 “췌낭은 좌우를 가르고 한강은 남북을 가르다”에서 논하여지고 있는 「서울」의, 어느 쪽이 진짜 서울인가, 라고 하는 것이 아니다. 중요한 것은 어디까지나, 시점과 표상을 열린 상태로 하는 것이 가능한가 아닌가의 문제이므로, 본 수업도, 그러한 문제의식의 위에 전개를 시도한 것이다.

이상과 같은 보충을 해 나가면서, 수업을 진행하여 왔으나, 여기에서 또 한가지 특별히 언급하고 싶은 것은, 학생들의 지방자가, 秋田에서 민박을 방문하고, 「서울스타일」의 전시 견학을 중심으로 한 오사카 투어를 실시했다는 사실이다. 투어는 6월 28일부터 30일까지, 2박3일이었다. 참가자는, 수강생 중 지방자 7명과 필자였으며, 「서울스타일」 전시 견학 외에, 「조선반도의 문화」를 시작으로 하는 민박의 상설전시와 리버티오사카

(오사카 인권 박물관. 특히 제일 코리언 등을 둘러싼 전시)의 견학을 하였다. 또한, 生野구에 가서 곱창을 먹고 御幸通상점가에 가까운 관음사(한반도계 주민을 주된 신자로 함)를 방문하여, 월드컵 관전회에 모여있던 현지의 한반도계 주민의 여러분들과 함께 한국팀을 응원했다.

이 견학회에 참가한 학생의 한 사람은, “오사카는 한국과의 관계가 대단히 깊다는 것을 알았습니다. 그래서 「서울 스타일」이란 전람회를 개최하는 일도 가능했던 것은 아니겠습니까. 秋田같은 지방도시에서는 무리” (3학년생 여자)라고 말하고 있는데, 「지방도시에서는 무리」인지 어떤지는 별개라고 하더라도 이 지적은 꽤 날카롭다.

「서울 스타일」에서는, 「민박마당」과 「민박시장」「원코리아 페스티벌 인 민박」을 시작으로 여러 면에서 교토, 오사카, 코베 주재의 조선반도계 주민이 다양한 형태로 관여하고 있어, 이 것이 「서울 스타일」에 독특한 다이나미즘을 가지게 하였다고 필자는 생각한다. 학생들과의 오사카 투어를 실시하는 동안, 민박과 오사카 주재 조선반도계 주민과의 깊은 관련성, 그 무대로서의 오사카의 다문화도시적 측면이란 것을 새롭게 하였다.

4월부터 시작한 수업은, 9월 20일에 종료하였다. 성적평가의 수단으로서의 학기말 리포트는 이하와 같은 과제를 설정하여 작성하게 하였다.

秋田대학에서는, 한국·조선어와 한국·조선문화에 관해 배우는 학생은 「소수파」, 「특이한 사람」으로 되어 있다고 합니다. 그들을 「소수파」, 「특이한 사람」이라고 보고 있는 「다수파」, 「보통」의 학생들 (경우에 따라서는, 한국·조선 또는 「아시아」에 관해 무지하거나 편견을 지닌 사람들일지도 모릅니다)을 대상으로,

- ① 한국·조선의 사회와 문화가 어떠한 사회·문화인가.
- ② 그것을 배우는 의미는 어떠한 것인가. 또, 그것은 왜인가.
- ③ 나와 당신은 이제부터 어떻게 살아 가야할 것인가. 또 그것은 왜인가.

를 설명하는 편지를 써 주십시오.

편지를 쓸 때에는, 수업에서 다룬 「서울 스타일」의 취지와 거기에서 얻은 정보를 적절히 포함시킬 것.

제출된 리포트 내용의 분석은, 별도의 기회로 미루겠으나, 실제의 서울(한국) 정보를 기초로 하여 상정된 주위의 편견을 논리적으로 깨뜨리고, 무지한 친구의 구제를 진지하게 시도하려고 한 내용이 많았다. 단, 수업 중에 필자가 강조하였던, 「『서울 스타일』은, 한국의 『대표』가 아니라, 어디까지나 한 가족의 모습이다, 그리고 이것은 한국에 한해서만 말할 수 있는 것이 아니라, 『문화』라는 것에 『전형』, 『대표』라는 것이 존재하지 않는 것은 어느 지역에 있어서도 마찬가지인 것이다. 『문화』란 그러한 것이다」라고 한 「포스트모던」적 관점에 대해서는

조금 이해하기가 힘들다라고 하는 결과로 끝난 리포트도 적지 않아, 이 부분이 2 학기에 개강되는 「조선문화론」에서의 과제로서 부상하였다³⁾.

4 마치면서

이상, 「서울 스타일」을 이용한 대학수업의 실천 보고를 하였다. 이번의 전시에 관해서는, 필자 이외에도, 많은 대학교원이 학생과 함께 견학을 하기도 하고, 또는 수업 중에 이것을 채택하기도 하지는 않았을까. 「서울 스타일」에 한해서가 아니라, 특별전시 기간 중과 기간 종료 후에는, 이러한 실천에 대한 보고를 가지고 논의하는 기회가 만들어지는 것이 좋지 않을까 라고 필자는 생각한다. 본고는 그러한 논의를 위한 원안으로서 제출하는 것이다.

또한, 내년도의 「조선문화기초론」에 있어서도 필자는 「서울 스타일」을 수업의 기동으로 두려고 생각하고 있다. 그 경우, 전시 자체는 끝났으므로, 전시내용을 기록한 비디오 등이 있다면, 그것을 구입하여 사용하려고 생각한다. 전시 종료후의 전시성과 활용법의 하나의 형태로 실천을 시도해보고자 한다⁴⁾.

주

- 1) 이러한 조선문화론 관계의 과목 외에, 네이티브의 비상근강사 선생님들의 많은 도움으로, 「조선어 표현법」, 「조선어 활용법」, 「조선어 회화활용법」(이하, 전학년 공통 교양 기초교육 과목), 「실무 조선어」, 「시사 조선어」, 「조선어 커뮤니케이션」(이하, 일본·아시아 문화 선택이수 전문과목) 등의 어학과목이 개설되어 있다.
- 2) 眞鍋씨는, 이 술화에 이어서, 「그러나, 결국 소수이지만 이웃나라에 관심을 기울이는 학생들이 조금씩 조금씩 늘어나」, 「후반은 실로 활기에 가득 차, 충실한 나날을 보낼 수 있었다」라고 말하고 있어, 상황은 개선의 방향을 찾아간다는 것을 알 수 있다. 그렇다고는 해도 「소수의 학생」 이외의 학생들에게, 「한국·조선에 대한 편견」이 완전히 없어진 것인가 라고 하면, 예측은 할 수 없는 상황일 것이다. 필자는, 이러한 상황 속에서, 조선문화론에 관계된 교육에 종사하고 있는 것이다.
- 3) 「조선문화기초론」 이외의 조선문화론 관계과목의 대강의 내용은, 다음과 같다.
 조선문화론 : 조선반도 (와 일본을 포함한 동아시아 전체)를 어떻게 볼 것인가, 에 관한 방법론, 개념, 분석도구를 교수한다. 오리엔탈리즘, 제국주의, 포스트 콜로니얼리즘, 근대와 탈근대, 아이덴티티, 다문화주의 등에 관해, 조선반도와 일본의 사례를 들어가면서 해설한다.
 조선문화론 연습 : 조선문화론에 관계된 최근문헌의 강독.
 일한 비교문화론: 재일조선반도계 주민을 둘러싼 제 문제를 검토. 이를 통하여, 안이한 「비교문화론」은 성립하지 않는다는 것을 알게 하는 것이 목표.
- 4) 마지막으로, 본문 중에서는 다룰 기회가 없었으나, 필자는, 대중화시대의 대학교육에 있어서

교과서·자료집으로서, 높은 수준의 내용을 실물자료에 적용시켜 시각적으로 나타낸 박물관 도록과 박물관 간행의 기관지는 최적이라고 생각하고, 그 사용을 실천하고 있는 점을 덧붙여 두고 싶다. 지금까지, 국립역사민속박물관의 “異界万華鏡” (武蔵대학인문학부·민속중교론), 오사카인권박물관의 “大阪人權博物館展示綜合圖録——人權からみた日本社会” (山梨県立 여자단기대학·일본문화론), 국립역사박물관의 역사계종합지 “歷博” (国学院대학·일본민속학) 등을 사용해 왔다.

